

道徳的価値の自覚を深める授業の展開

～ 友だちを思いやる心を育む学習指導の工夫を通して～



那覇市立真地小学校教諭
照屋 枝梨子

目次

テーマ設定の理由	27
研究目標	28
研究仮説	28
1 基本仮説	
2 作業仮説	
研究構想図	28
研究内容	28
1 道徳的価値の自覚を深める授業について	
(1) 道徳的価値とは	
(2) 道徳的価値の自覚を深めるとは	
2 学習指導の構想について	
(1) 指導内容の重点化	
(2) 単元的道徳学習とは	
3 資料分析について	
(1) 資料分析とは	
(2) 資料分析の方法	
4 指導方法の工夫について	
(1) 資料提示の工夫	
(2) 話し合いの工夫	
(3) 書く活動の工夫	
授業実践	31
1 単元主題名	
2 単元のねらい	
3 単元設定の理由	
4 指導計画	
5 本時の学習	
(1) 主題名	
(2) 資料名	
(3) 主題設定の理由	
(4) 資料分析	
(5) ねらい	
(6) 授業仮説	
(7) 展開	
(8) 評価	
結果と考察	36
研究の成果と課題	40
1 成果	
2 課題	

道徳的価値の自覚を深める授業の展開 ～友だちを思いやる心を育む学習指導の工夫を通して～

那覇市立真地小学校教諭 照屋 枝梨子

テーマ設定の理由

今日、児童を取り巻く環境は、物質的な豊かさの中で、少子化、情報化、国際化と急激に変化している。それに伴い、社会全体のモラルの低下、児童の自立心、責任感の欠如、いじめ、不登校など様々な問題が生じ、豊かな心を育てる道徳教育の一層の充実が求められている。

また、文部科学省が示した「生きる力」を育むという教育理念の中にも、「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」が求められ、「豊かな人間性」を育む道徳教育は「生きる力」の重要な柱であるともいえる。

新学習指導要領の第1章総則においては「学校における道徳教育は、道徳の時間を要とし学校の教育活動全体を通じて行うもの」とし、「要」という表現を用いて「道徳の時間」の中核的な役割や性格を明確にしている。これは、それぞれの教育活動で行われる道徳性の育成が、道徳の時間において、補充、深化、統合されるのと同時に、道徳の時間で行った指導が学校の教育活動全体に波及し生かされていくという関係も示している。

道徳の時間は、人間としてよりよく生きたいと願うその基礎となる道徳的価値について学び、それを自分の生き方に結びつけながら、自覚を深め、道徳的実践力を育成していくことを目標としている。したがってこの「要」である「道徳の時間」をどのように充実させるかは、今後の学校教育の道徳教育において重要である。

これまでの授業実践を振り返ってみると、読み物資料を中心に道徳的価値の追求を行ってきた。発表は活発に行われたとしても、資料の読み取りの活動が主となり、児童の本音に迫ることができず、知識としての価値の理解にとどまることが多かった。そのため自分との関わりで価値を考えたり、自分の生き方について考えることが弱く、道徳的価値の自覚の深まりは表層的であったように思われる。

本学級の実態をみると、子ども達は中学年に入り、学校にも慣れ活動範囲も広がってきている。それに伴い、友人関係も流動的だった低学年にくらべ、同じ趣味、同じ考え方の固定化したものになりつつある。そのような中、子ども達にとって友だちとは自分と仲良くしてくれる人、遊んでくれる人、というような自己中心的な捉え方の児童もまだ多く、自分の損得の感情で友人関係を考えることがありトラブルになることもある。

そこで、本研究では、友だちを思いやる心を育む学習指導の工夫を通して道徳的価値の自覚を深める授業の展開を行っていきたい。「友情・信頼」の価値を中心におき内容項目の関連を図った道徳の時間を発展的、計画的に配列することで、児童の道徳的価値の自覚を深めさせていきたい。また資料の分析や指導法の工夫をすることにより、児童が主体的に内面に根ざした価値の自覚を深め、友だちと互いに思いやり、信頼し、助け合おうとする児童を育むことができると考え本テーマを設定した。

研究目標

友だちを思いやる心を育む学習指導の工夫を通して、道徳的価値の自覚を深める研究をする。

研究仮説

1 基本仮説

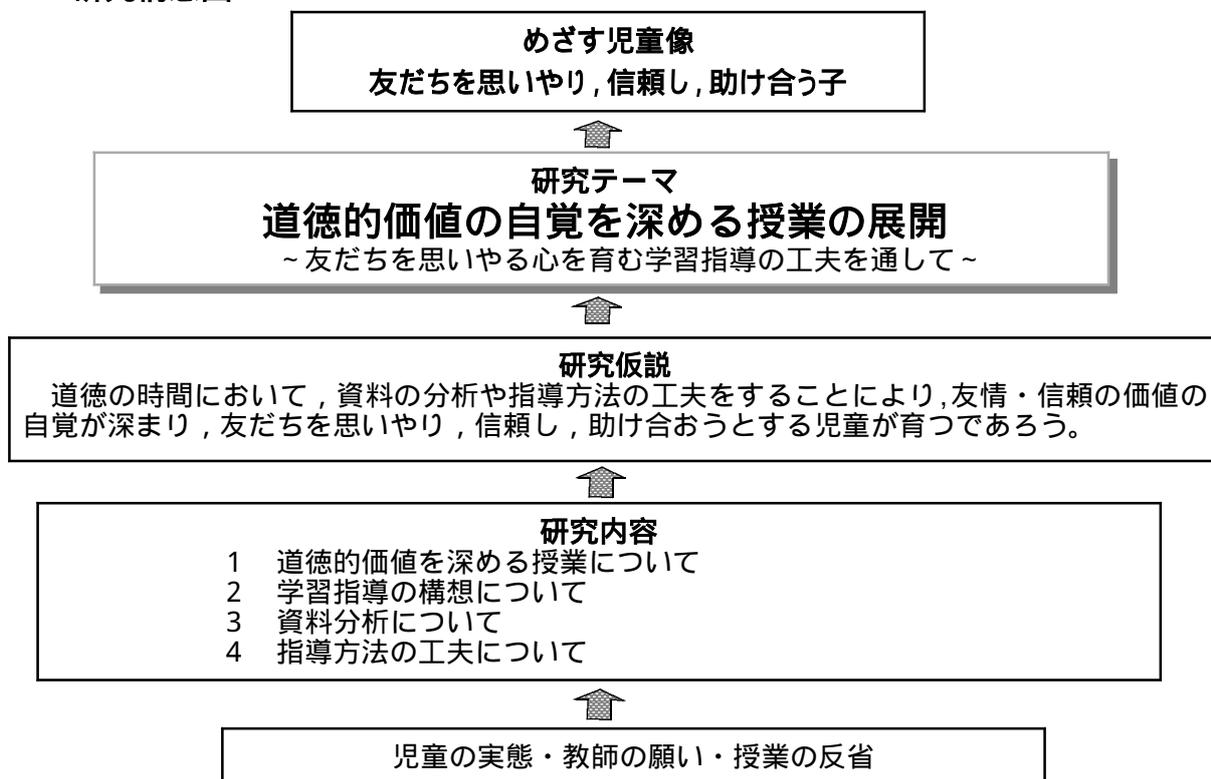
道徳の時間において、資料の分析や指導方法の工夫をすることにより、友情・信頼の価値の自覚が深まり、友だちを思いやり、信頼し、助け合おうとする児童が育つであろう。

2 作業仮説

(1) 友だちを思いやる心を育むために、内容項目の関連を図った道徳の時間を発展的、計画的に配列することで、より友情・信頼の価値の自覚が深まるであろう。

(2) 道徳の時間において資料分析と資料提示、話し合い、書く活動などの工夫をすることにより、児童が主体的に考え、自分自身をふり返り内面化することで友だちを思いやり、信頼し助け合おうとする意欲や態度が身に付くであろう。

研究構想図



研究内容

1 道徳的価値の自覚を深める授業について

(1) 道徳的価値とは

道徳的価値とは、人間としてよりよく生きるとはどういうことなのかを示すものであり、人間らしさの基本である。新学習指導要領では、小学校6年間に児童が自分のものとして、身につけ発展させていく必要がある基本的な道徳的価値は、内容項目として、小学校低学年16項目、中学年18項目、高学年22項目示されている。

(2) 道徳的価値の自覚を深めるとは

道徳的価値の自覚を深めるとは、児童が道徳的価値を自分とのかかわりにおいて捉え、知識として理解しているだけでなく、自分自身の生き方として本当に大切であると感じ、受け入れることである。道徳的価値が真に大切なものだと自覚することで自らの行動や行為の在り方などを変えていく。このような心の動きが道徳的価値の自覚を深めることと捉える。

小学校学習指導要領解説道徳編では道徳的価値の自覚について「道徳的価値についての理解」「自分との関わりで道徳的価値がとらえられること」「道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われること」の三つをを押さえることが必要だとされている。この三つを道徳の時間のあり方にあてはめるとつぎのようになる。

資料などをもとに、ねらいとする道徳的価値に「ああ、そうだったのか」と実感を伴って気付くようにする。

自分なりの価値観を深めていくことを通して、「今までの自分はどうかであったか」を見つめ、自己理解を深めるようにする。

今後の自分の生き方について「～したい」「～しようという気持ち」を持てるようにする。

道徳の時間においては、これらのことが児童の実態に応じて主体的になされるように展開を工夫したいと考える。

2 学習指導の構想について

道徳の時間の学習指導を構想する際には、指導する学級の実態、児童の発達の段階、指導の内容や意図、資料の特質、他活動との関連などに応じて柔軟な発想を持つことが大切である。学習指導要領解説道徳編によると、「重点的な主題の学習を進める場合や、主題や資料の性格等を考慮した結果によっては一つの主題について複数時間扱いの指導とすることが考えられる。」と示している。また「複数時間取り上げる内容項目については相互の関連を工夫することによって各時間の学習指導を多様に組むことができる。」とも示している。

(1) 指導内容の重点化

新学習指導要領では道徳の指導内容を示すに当たって、「各学校においては、各学年を通じて自立心や自律性、自他の生命を尊重する心を育てることに配慮するとともに、児童の発達段階や特性を踏まえ、指導内容の重点化を図ること。」とし社会的な要請、今日的な課題及び発達段階や特性を踏まえ、今回の改訂では(表1)のように踏み込んだ表現となっている。中学年の重点化の内容の一つに「身近な人々と協力し合う態度を身につけること」がある。そこで、本研究では身近な人々を「友だち」に焦点化し、重点化を図るために他の関連項目とのかかわりを持たせる単元的道徳学習を構想する。

(表1) 重点化する指導内容

各学年共通			
自立心・自律性、自他の生命尊重			
低学年	中学年	高学年	中学校
基本的な生活習慣、社会生活上のきまり、善悪の判断	集団や社会のきまり、身近な人々との協力・助け合い	法や決まりの意義、相手の立場の理解・支え合い、集団での役割と責任	規範意識、社会参画

(2) 単元的道徳学習とは

毛内嘉威(2008)は「複数の道徳の時間との関連を踏まえて指導過程を扱い、道徳の時間を単元的に行う学習」を提示している。「道徳の授業群を組み立てて連続に扱う場合、道徳の時間1単位時間においてねらいとする価値の内面化を図ることはもちろんであるが、単元の中で前時の授業をふり返ったり次時の授業を予告したりすることで単元全体を通して価値の内面化を図ることを意図している。さらに複数の道徳の時間との関連をふまえて指導過程を扱うことにより、子どもの意識を連続させることができる。」としている。

そこで本研究では指導内容の重点化を図り、道徳的価値の自覚をより深めるために、他の内容項目との関連を図った単元的道徳学習を構想する。

3 資料分析について

道徳の時間の主題は、「ねらい」と資料によって構成されており、道徳の時間の指導において、資料の果たす役割はきわめて大きい。その資料を授業の中でどう活用するかは指導にあたる教師がどれだけ資料を研究し、検討しているか、教師がどれだけ深く資料を読みとり自分なりの資料観をもっているかが重要だと考える。

(1) 資料分析とは

資料分析とは、どの場面を生かして、どういう発問をして、どのように子どもたちに教師のねらいとすることや、価値についての把握を深めさせていけばよいかを考えるために必要である。したがって、資料の「どの内容」を、どの指導過程の「どの段階」に位置づけて、「どんな方法」で使うのが適切かを明らかにしていくことである。

(2) 資料分析の方法

資料のあらすじ、場面、状況、事実等の推移をとらえる。

場面ごとの登場人物の心の動き、心の中をキーワードとなる表現などを見つけ読みとる。(必ずしも文章の中に表現されているとは限らない)

登場人物(主人公)の行為やその奥にある心の動きに含まれている価値を押さえる。

資料に含まれている価値は一つではないので、ねらいとする道徳的価値に迫るためには資料のどこを、どう生かせばよいか検討する。

児童の実態を踏まえながら、発問の意図を確認し、発問を構成する。

4 指導方法の工夫について

道徳の時間のねらいを効果的に達成するには、児童の感性や知的な興味などに訴え児童が問題意識を持ち、意欲的に考え、主体的に話し合うことができるように、ねらい、児童の実態、資料や学習指導過程に応じて、最も最適な指導方法を選択し、工夫して生かすことが必要である。本研究では児童がより主体的に考えることができるように、資料提示の工夫と話し合いの工夫、道徳的価値が子ども自身の問題として捉えられるよう、自己を見つめる手立てとして書く活動の工夫が必要であると考えられる。

(1) 資料提示の工夫

資料提示の方法としては、教師による読み聞かせが一般的に行われている。その読み物資料を扱った授業を効果的に進めていくためには読み物資料の持つ特性を考慮した様々な工夫が必要である。そこで本研究では読み物資料の分割提示を取り入れる。読み物資料の

分割提示とは、読み物資料をいくつかに分けて提示する方法である。主人公に葛藤や問題が起こった場面で分割して資料を提示し、児童一人一人に課題意識を持たせ、どう解決・処理するか考えさせる。人が生活していく中では、常に様々な問題があり葛藤場面、選択場面がある。主人公の選んだ解決方法をすぐに示すのではなく、自分ならどう解決していくか、どうすることがよいのかを考えさせるために読み物資料を分割して提示する。主人公に起こった問題を、人ごとではなく自分の問題として捉えさせることにより、真剣に考えることができる。また、自分の考えと友だちの考えを比較し、よりよい解決策を考えさせていく中で道徳的価値の自覚を深めることができると考える。

(2) 話し合いの工夫

話し合いは児童相互の考えを深める中心的な学習活動であり、道徳の時間においても重要な役割を果たす。しかし、児童の実態として道徳の時間に自分の考えや思いを話すことに抵抗を感じている児童も多く、一部の児童の発言で授業が展開されていくこともある。

永田繁雄（2004）は、「中学年は、発達の特性として、小集団を生かした学習が大きな効果を発揮する時期である」と述べている。そこで本研究では、児童が自分の考えや思いを自由に発言できるようになるために、ペアによる話し合い、グループによる話し合いと多様な形態を経験させる工夫を取り入れる。自分の思いを伝えることに慣れることにより、徐々に話し合い活動に主体的に参加できるようになると考える。同時に、児童の考えや思いを自由に発言できる学級の雰囲気作りや、日頃から温かな人間関係を大切にしたい学級経営を行うことが大切だと考える。

(3) 書く活動の工夫

書く活動は、一人一人の自己の振り返りを促すために重要な活動である。静かに自分の心と向き合い、道徳的価値について考えを整理し、書くことで、自分の思いを表現することができるため、全員参加、全員思考の授業を行うことができる。道徳的価値とこれまでの自分の行動を照らし合わせて振り返り、これからの行動にどう生かしていくかを考え表現することは、道徳的価値の自覚を深めるために大切な学習活動であると考えられる。

書く活動を行うときは、考えるための十分な時間を確保することが重要である。また、自分の気持ちや考えを自分の言葉で素直に書かせるためには、書く形式や、発問、指示文等を工夫することも大切である。本研究では書く活動において、できた、できなかったという行動傾向よりもどんな気持ちからそうなのか、内面を振り返らせ多様な考えを引き出させたい。

授業実践

- 1 単元主題名 友だちを思いやる心
- 2 単元のねらい 友だちのことを思いやり、互いに助け合う心を育む。
- 3 単元設定理由

中学年になると交友関係が広がり、友だちを大切にする傾向も強くなっていく。このような友だちづきあいは、児童の学校への適応を左右する問題であるばかりでなく、ひいては社会生活や将来にも影響を与える問題であるといえる。中学年に入り仲間関係が集団化していくこの時期に、健康的な仲間集団を積極的に育成することは大切である。

谷島弘仁（2007）は「友だちとの関係を円滑に進めるうえで大切なことは友だちを気

づかうことができるかどうかである」とは述べている。友だちを気づかうとは、どれだけ相手の立場に立つことができるかということでもあり、思いやりの気持ちを持って接することだと考える。

そこで本単元では、「友だちを思いやる心」を育むために3時間の道徳の単元を設定した。第一次において、相手の気持ちになって考えることの大切さに気づき、第二次ではだれに対しても思いやりの心で接すること、そして第三次では一番身近な友だちを思いやる心について一連の流れで学習することで、「友だちを思いやる心」の価値の重点化を図る内容の単元構成にする。

この単元を通して、今までの目に見える仲良しから、一歩進んで友だちを思いやり、助け合う心が友だち関係にも大切だということに気づいてほしいと願う。

4 指導計画

第一 次	主題名：相手の気持ちになって 資料名：「いやなかんじ」 2 - (1)礼儀 『考える道徳 3年』日本標準 ねらい：礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する態度を育てる。
第二 次	主題名：思いやりの心は自分から 資料名：「貝がら」 2 - (2)思いやり・親切 ねらい：思いやりの心を持ち自分から積極的に友達に関わっていきこうとする心情を育てる。
第三 次	主題名：友だちを思う心 《 本 時 》 資料名：「ともだち」 2 - (3)友情・信頼 『よりよく生きる力を育てる読み物資料と展開例25選』 ねらい：友だちを思いやり、助け合おうとする心情を育てる

5 本時の学習

(1) 主題名 友だちを思う心 内容項目 2 - (3) 信頼・友情

(2) 資料名 『ともだち』

(3) 主題設定の理由

価値観

新学習指導要領では発達段階や特性を踏まえ各学年の指導の重点化を図ることが示された。中学年においては「身近な人々と協力し助け合う態度」が重点化された項目の一つにあげられ、裏を返せばそれが今の子ども達の重要な課題であることを示している。中学年になると学校生活にも慣れ、行動範囲や人間関係が広がり、一番多く接する身近な人々といえは「友だち」である。

友だちという存在について考えたとき、たのしい時間を共有するだけが友だちではなく、困った時や悩んだときに、気持ちを察して理解し、信頼し、助け合うことができるのが本当の友だちだといえる。これまでの自分を中心とした友だち関係から、相手の気持ちや考えを配慮することの大切さがわかるようになることは今後のより良い友だち関係を築く上で重要だと考える。友だちの関係が広がりを見せる中学年において、友だちの心を気遣い助け合おうとする心情を育てていきたい。

児童観

本学級の子供達は、明るく、活動的で休み時間には友だちと仲良く遊ぶ姿が多く見られる。生活実態調査からも子供達全員が「友だちはいる」と感じていることがわかった。

あなたにとって友だちとはどんな人ですか？という問いに対しては、「一緒にいて(遊

んで)たのしい人」という答えが47.5%と一番多く、続いて「大切な人」という答えが17.5%という順になった。このことから、子どもたちにとって一緒に遊ぶ関係を友だちと捉える傾向がうかがえる。

中学年に入り交友関係が広がり、友だちを大切にする傾向も強くなってきているが、どうすることが友だちを大切にすることなのかというところまではまだ考えが及んでいない子が多い。自己中心的な面もまだまだ多く見られるこの時期に、これまでの友だちとの関わり合いを見直すことは大切なことだと考える。

資料観及び指導観

本資料は、子どもたちが日常で起こりうる身近な状況である。夏のある日、「ぼく」(さとし)、まなぶ、ひでとしの三人は、だまってカミナリじいさんの屋敷に入って虫取りをしていたがカミナリじいさんに見つかって逃げ出した。しかし、ヒデトシだけが転んで捕まってしまう。本資料をここで分割提示し「これからどうなるだろうか」ということを自分の問題として考えさせたい。そして、グループでの話し合い活動を取り入れることで、自分の考えを発言しやすくし、他者との考えの違いに気付き、より深く内面を見つめさせたい。また、多様な考えに触れることは、資料後半への興味関心を高めることへとつながると考える。後半の資料提示の後、ヒデトシのところへ戻ると決めた二人が「晴れ晴れとした気分になった」という気持ちについてなぜそう思ったのか考えさせる。二人の「戻ろう」と決めた行動が残されたヒデトシの立場に立った思いやりからの行動であったことを捉えさせ、友だち関係には相手を思いやる心が大切だという本時のねらいである価値に気付かせたい。展開後段では、「友だちを大切にすることはどういうことなのか」をこれまでの自分の行動と照らし合わせて振り返り、ワークシートに書く活動を取り入れることで自己の内面をじっくりと見つめさせる。さらに本時の価値をこれからの行動にどう生かして行くか心の奥にある気持ちを引き出させることで道徳的価値の自覚が深まると考える。

(4) 資料分析

場面	登場人物の心の動き	基本的な発問	補助的な発問
<p>前半</p> <p>「こら何をやっどるか」突然のカミナリ声にびっくりした。オオクワガタをとっているところをカミナリじいさんに見つかってしまった。</p> <p>『カミナリじいさん』はよく怒る。あいさつをしなかった時、たばこを吸っていた高校生もステッキを振りながら追いかけていた。</p> <p>カミナリじいさんの屋敷に三人でこっそり入り、クワガタやカブトムシをとっているとカミナリじいさんに見つかった。二人に目で合図をし、僕が駆け出し続いてマナブとヒデトシも駆け出した。</p>	<p>・びっくりした。 ・あと少しでオオクワガタが取れるところだったのに。 ・残念だ。</p> <p>・カミナリじいさんは厳しくてこわい。</p> <p>・カブトムシやクワガタがたくさんいるな。 ・ほしいなー。 ・見つかった。 ・どうにかして逃げよう。 ・捕まったら怒られる。</p>	<p>・カミナリじいさんはどんな人。</p> <p>・三人にどんなことが起こったのかな。</p>	<p>・間違ったことをしたら誰でも叱る近所の人だということを確認する。</p> <p>・話の大まかな流れを確認する。</p>

<p>ヒデトシが滑って倒れた。僕とマナブは後ろも見ずに必死に空き地まで逃げた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・少しホッとした。 ・クワガタが捕れず残念 ・ヒデトシどうしたのさ。 	<p>カミナリじいさんから逃げて来た二人はどんな気持ちだったでしょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・逃げることに必死でヒデトシのことはまだあまり考えていない二人を捉えさせる。
<p>後ろからヒデトシがこない。ヒデトシのことが気になるが、せっかく逃げて来たのに戻りたくない。僕は悩んだ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒデトシ捕まったのかな ・ヒデトシ運が悪かったな。 ・カミナリじいさんは怖いから戻りたくないな。 ・ヒデトシは放っておいていいの。 ・せっかく逃げて来たのに戻りたくない。 ・後でカブトムシー匹多やろう。 ・どうすればいいのさ。 	<p>これからどうなったと思いますか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のことだけを考えていた心情と一人残してきたヒデトシのことが気になる心情とで葛藤する気持ちを考えさせる。
<p>後半 やっぱりヒデトシのことが気になる。僕とマナブは怒られるために戻ると決めた。すると何だか晴れ晴れとした気分になった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・やっぱりヒデトシが気なる。 ・ヒデトシがかわいそう。 ・いいのか、このままで ・友だちを見捨てることできない。 ・いい時だけの友だちじゃない。 ・よし、行こう。 	<p>なぜ二人は晴れ晴れとした気分になったのでしょうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・戻ろうと決めた二人は、ヒデトシのことを大切な友だちだと考えたということに気づかせたい。 ・友だちを思う心は相手の立場にたって考えることだということに気づかせたい。
<p>僕らは駆け込んで大きな声で謝った。しかしカミナリじいさんは笑顔で「よく戻ってきた」「友だちはいいもんじゃ」といいながら頭をなでた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・殴られるかもしれない ・おじいさんの笑顔初めて見た。 ・戻ってよかったな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・この気持ちはヒデトシに対するどんな気持ちなんだろう。 ・もし、二人が謝りに行かなかったら、この3人はどうなったと思いますか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・逆説の質問をすることで、友だちでいるために大切なことをより深く考えさせる。

(5) ねらい

友だちを思いやり、助け合おうとする心情を育てる。

(6) 授業仮説

道徳の時間において、読み物資料を分割して提示し、考える場を与えることにより、自分の問題として捉え、道徳的価値についての課題意識を持つことができるであろう。

グループでの話し合い活動の場において、多様な価値に出会うことにより、自他の違いに気づき、より深く自己の内面を見つめることができるであろう。

価値の自覚を深める場において道徳的価値（友だちを思いやる）について自分の内面を見つめて、書く活動を行うことにより、これからの友だち関係をより良くしていこうとする心情を高めることができるであろう。

(7) 展 開

	学習活動と主な発問	予想される児童の反応	指導上の留意点
導入 3分	<p>1 「友だち」について想起する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みなさんは友だちはいますか。 ・「友だち」というと誰の顔が思い浮かびますか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・たくさんいる ・他のクラスや学校以外にもいるよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちを静かに思い浮かべるようにする。 ・授業の方向づけをする。
展開 前 段 2.5分	<p>2 資料『友だち』の前半を読んで話合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カミナリじいさんや3人の状況について確認する。 <p>カミナリじいさんから逃げてきた二人はどんな気持ちだったでしょう。</p> <p>この後、どうなったと思いますか。(グループで話し合う)</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・逃げることでよかったです。 ・ホッとした。 ・ヒデトシが心配。 ・戻ってヒデトシと一緒に謝る。 ・二人は逃げてヒデトシだけ怒られる。 ・戻らないで後でヒデトシに謝る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料の読み聞かせをする。 ・絵を提示しながら話を進め場面を想像させる。 ・あわてて逃げ出してきた二人の心情について考えることができるようにする。 ・グループ内で考えを伝え合うことで自他の考えの違いに気付き自分の考えをはっきりさせる。 ・多様な考えを出させることで後半の展開に興味・関心を持たせる。
	<p>3 資料の後半を読んで話し合う。</p> <p>なぜ二人は晴れ晴れとした気分になったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もし、二人が謝りに戻らなかったら、この3人はどうなっていたと思いますか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちだから見捨ててはいけない。 ・ヒデトシ一人につらい思いをさせてもいいのか。 ・友だちなら、怒られる時でも一緒だ。 ・ヒデトシはがっかりする。 ・友だちじゃなくなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちのことを思いやり行動したことを考えさせることにより、ねらいとする価値に迫らせる。 ・逆説の発問をすることで友だちでいるために大切なことをより深く考えさせる。
展開 後 段 15分 終 未 分	<p>4 友だちを大切にすることとはどういうことなのか。自分のことなどを振り返りワークシートに書く。</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・記入後数名に発表させる。 <p>5 教師の説話を聞く</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・こまっている時に助けてあげる。 ・自分勝手にしない。 ・相手のことを考えてあげる。 ・悩んでいるときに相談にのってあげたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・書くことにより深く自己を見つめさせる。 ・互いに相手のことを考えて助け合えるような友だち関係を築こうとする気持ちを高める。

(8) 評 価

友だちを思いやり、助け合う気持ちが高まったか。(ワークシート、発表)

結果と考察

【検証1】

友だちを思いやる心を育むために、内容項目の関連を図った道徳の時間を発展的、計画的に配列することで、友情・信頼の価値の自覚がより深まるであろう。

【結果】

図1は「信頼・友情」の内容項目の本時1回の授業を行った学級の事前・事後に実施したアンケート「あなたにとって友だちとはどんな人ですか」の結果である。

図2は「信頼・友情」を中心におき内容項目の関連を図った3時間の道徳の授業を行った学級の事前・事後に実施したアンケート「あなたにとって友だちとはどんな人のことですか」の結果である。

【考察】

「あなたにとって友だちとはどんな人ですか」という質問に対して、事前のアンケートでは両学級とも「遊んで楽しい人」「気が合う人」を合わせた割合が高く、友だちの存在を自分を中心とした関係として捉えている児童が多いことがわかる。

しかし、事後のアンケートでは本時1回の授業を実施したクラスよりも、内容項目の関連を図った3時間の授業を実施したクラスの方が友だちを「助け合う人」「大切な人」として挙げる児童が増え、友だちの捉え方に広がりや心のつながりを重視した深まりが見られるようになったことがわかる。

資料1は単元終了後に児童が書いたワークシートである。この児童の感想から、単元の二次に行った授業のねらいである「自分から積極的に友だちへ関わろうとする心情」と三次のねらいである「友だちを思いやる心情」の気持ちがこれまでの自分をふりかえりながら書かれている。その他のワークシートからも「こそこそ話をすることは相手に嫌な思いをさせるのでこれからはしないようしたい」などと書いている児童も多かった。

資料2では、この児童の友だち関係に変化が表れたことがわかる。3時間の道徳の学習を通して友だちが今までの自分を反省し、行動が良い方に変化してきたことを実際に接してい

図1 1回の道徳の授業実施のクラス

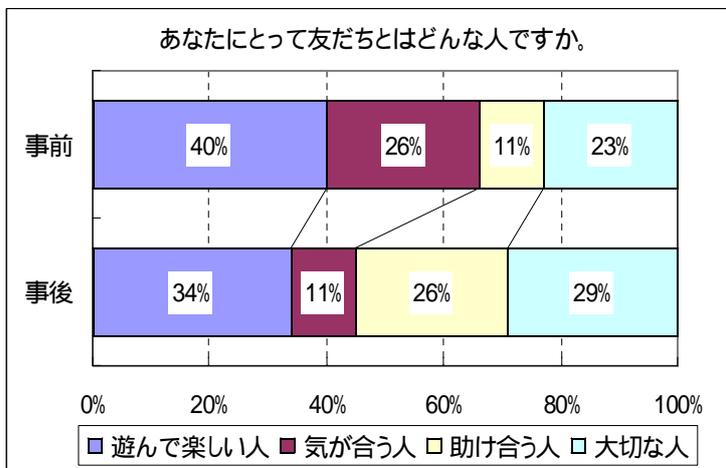
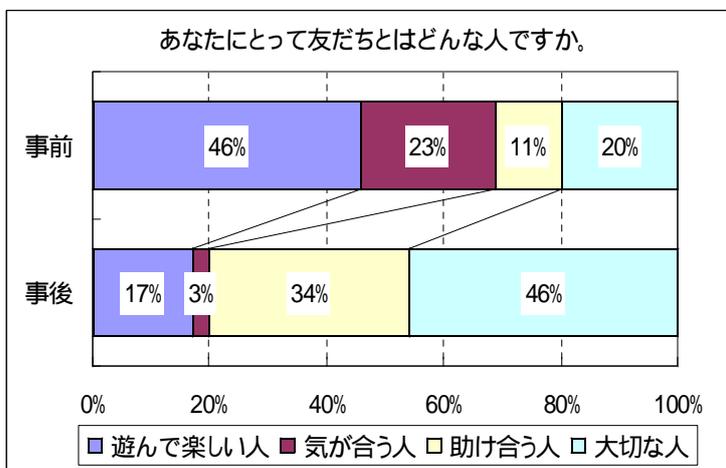


図2 内容項目の関連を図った3時間実施のクラス



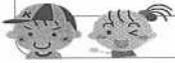
た児童が感じている。これらのことから、児童が友だち関係を築く上で相手の立場に立ち、思いやる心が大切だということを感じとっていることがわかる。

以上のことから、友だちを思いやる心を育むために内容項目の関連を図った道徳の時間を発展的、計画的に配列することは友情・信頼の価値の自覚を深めることにおいて有効であるといえる。

資料 1

友だちを思う心
これまでの道徳で「いやなかんじ」「かいがら」「ともだち」の勉強をして、思ったこと、考えたことを自由に書きましょう。
3年2組名前

今まで、自分ほ友だちに且かけられてばかりでした。なぜなら、友だちに勉強をおしえてもら、たりいろいなものをかしてきてたりして且かかっていたので、今では自分が友のやくに立ちたいです。



資料 2

友だちを思う心
これまでの道徳で「いやなかんじ」「かいがら」「ともだち」の勉強をして、思ったこと、考えたことを自由に書きましょう。
3年2組名前

ぼくは〇〇さんになにもしてないのにおされたりました。でもさいきんこの勉強してさめなくなってきました。それと「だれがすき」と〇〇さんにいわれたら「〇〇」といったらさんにわらわれたのでいげでいた。でもさいきんは いわれなくなっているのよかったです。ほんとにこの勉強をしてよかったなとおもいました。



【検証 2】

道徳の時間において資料分析と資料提示、話し合い、書く活動などの工夫をすることにより、児童が主体的に考え、自分自身をふり返り内面化することで友だちを思いやり、信頼し助け合おうとする意欲や態度が身に付くであろう。

(1) 資料分析について

【結果】

資料の分析を行い、ねらいとする価値の把握を深めさせるために重要なことは発問構成である。本時のねらいとする価値「友だちを思う心」に迫るために表 2 のような発問構成をし児童の反応から分析した。

【考察】

資料において、二人にとって戻ることは苦況な状況であるにもかかわらず、戻ろうと決めた心情に本時のねらいとする価値「友だちを思いやる心」が含まれていると捉え T 5 を中心発問とした。

人間には誰しも心の美しさ、強さとともに利害などに左右される二面性がある。その二面性に着目し、児童の自然な心情に沿っていく発問から素直な表出ができるような構成を考えた。まず、T 1 の発問をすることにより

表 2 授業記録の抜粋
「ともだち」

T 1 : カミナリじいさんから逃げたきた二はどんな気持ちだったかな？
C 1 : ホットした。
C 2 : クワガタが捕れず残念。
T 2 : これからどうなったと思う
C 3 : 戻って一緒に謝ると思う。
T 3 (補) : なぜそう思うの？
C 4 : 友だちがかわいそう
C 5 : 二人は逃げると思う
T 4 (補) : なぜそう思うの？
C 6 : おじいさんが怖いから
T 5 : (中心) なぜ二人は晴れ晴れとした気持ちになったのだろう？
C 7 : 友だちを見捨てることはできない
C 8 : ずっと友だちでいたいから
C 9 : 悪いことをしたから謝ろうと思った
T 6 (補) : 二人の戻った時のヒデトシへの気持ちは何だろう？
C 10 : ヒデトシへの思いやり
C 11 : ヒデトシのことを考えた。
C 12 : ヒデトシへの友情。

「ホッとした」「助かった」など主人公に共感し、自分自身のことを優先に考えた児童の素直な意見が出された。しかし、T2の発問では、児童は自分に置き換えてどうするべきなのかを立ち止まって考え「戻って一緒に謝る」あるいは「怖いから逃げる」など心が揺さぶられていることがわかる。価値のねらいに迫るT5の中心発問では、「友だちでいたいから」「友だちを見捨てることはできないから」などの意見が出された。これらのことから児童の心情が初めは自分自身のことを優先に考えていた心情が発問により、友だちを思いやる心情へと変化してきたことがわかる。そしてT6の発問で「ヒデトシへの思いやり」「ヒデトシへの友情」などの意見が出され、二人の行動は友だちの立場になって考えた「友だちへの思いやり」であることを児童と確認することができた。

したがって道徳の授業における発問は、ねらいとする価値について、児童が自分自身に問いかけ考え、悩み、自覚に導くことが重要だということがわかる。そのため資料分析は資料のどの場面を生かして、どういう発問をして、どのように子ども達にねらいとする価値についての自覚を深めさせていけばよいかを考える手だてとして有効だといえる。

(2) 資料提示について

【結果】

資料を前半と後半に二分し、教師が話の流れに沿って絵を黒板に提示し、移動させながら、読み聞かせを行った。資料前半を読み終わり、この後、話はどんな展開になるだろうかと考えさせた。二人の行動を予想し一人一人の考えを、グループ内で伝え合った。「二人は戻って一緒に謝ると思う。なぜならともだちは大切だから」「戻らないと思う。おじいさんに怒られるのは怖いから」などの意見が出た。その後、後半の資料を読み視覚においても主人公の思考の流れを明確にするために絵の移動と矢印などで気持ちの変化を示した。



【考察】

読み聞かせを行い、話の流れを視覚で捉えやすく板書したことで、資料から考えを探すのではなく、児童が自分自身の考えや思いを発表しようとする姿が見られた。

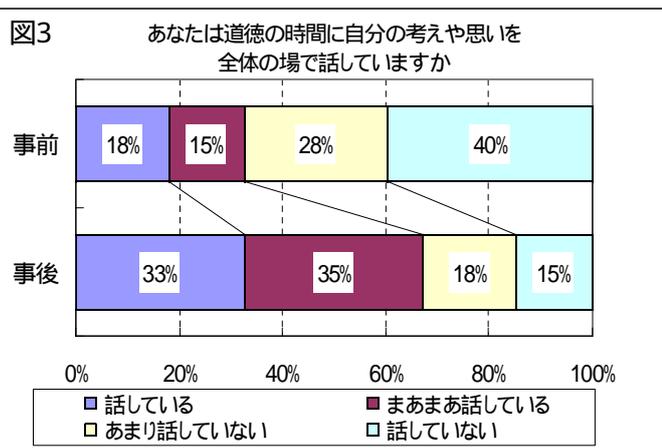
主人公の選んだ解決方法をすぐに示すのではなく、主人公に葛藤や問題が起こった場面で分割して資料を提示することにより、自分ならどう解決していくか、どうすることがよいかを児童が主体的に考え、グループで話し合うことができた。また、いろいろな考えを出し合うことで、その後の展開への期待が高まり後半の学習への関心・意欲へとつながったと考える。

(3) 話し合い活動について

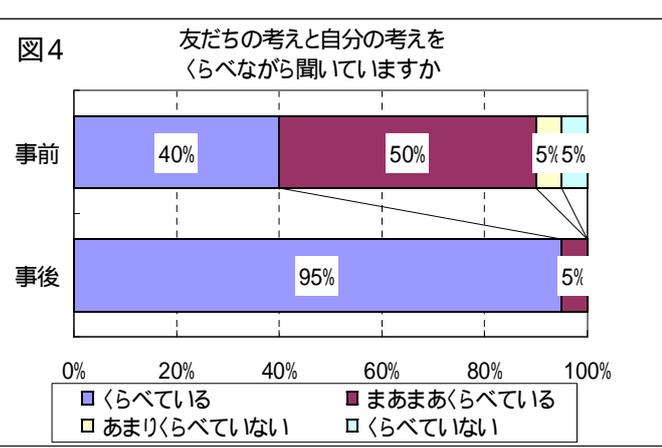
【結果】

図3の単元事前でのアンケートでは、「自分の考えや思いを全体場で話すことができる」

「まあまあできる」とした児童は、全体の33%であった。話せない理由としては「恥ずかしい」「みんなに笑われないか心配」「緊張する」などを挙げている。事後のアンケートでは68%の児童が「話している。まあまあ話している」となり、単元を進めていく中で、道徳の時間に自分の考えや思いを話せる児童が増えた。



また、図4「あなたは道徳の時間に友だちの思ったことや考えたことを聞いて自分の考えとくらべたりしていますか」の問いに対して、事前では、40%の児童が「くらべている」と答えたのに対して単元終了後のアンケートでは95%の児童が「くらべている」と答えた。



【考察】

話し合いは児童相互の考えを深める中心的な学習活動であり、道徳の時間においても重要な役割を果たす。そんな中、自分の考えを全体の場で発表できない児童に対して、隣の席の児童とのペアによる話し合い、4人グループによる話し合い活動と多様な形態を経験させることで、自分の考えを発言することができるようになったと考える。それと同時に「話せない理由」を改善するために、教師の受容的な姿勢や友だちの違う意見を受容する学級の雰囲気作りを「みんなちがって、みんないい」をクラスのスローガンに掲げ、すべての教育活動の中で意識づけてきた。また他者の考えと自分の考えと聞き比べることで、多様な価値観（感じ方・考え方）に触れることができ、そのことによって自分の価値観を自覚することになったと考える。

(4) 書く活動について

【結果】

展開後段において、「友だちを大切にすることはどうすることだと思いますか」という発問でこれまでの自分をふり返りながら考え書く時間を設定した。友だちを大切にすることは「相手のことを考えること」「相手を思いやること」「相手を気遣うこと」など友だちへの思いを表した児童が45%「困っている時に助けてあげる」「一人ぼっちにしない」など大切にしたこと、されたことを具体的に挙げる児童が55%おり、児童全員が自分の考えを書くことができた。また、「今日の学習で学んだことは」の発問では「友だちのことを考えてあげる」(資料3)などこれからの友だち関係において、発展的な考えや、思いを書いた児童は75%であった。

【考察】

これまでも、書く活動にワークシートを取り入れてきた。その際、「これまでどんなことをしましたか」「これからどんなことをしたいですか」という行為を記入させるような発問をしてきた。そのため、ワークシートには児童の行動傾向のみが表れ、思いや気持ちを表現することはなかった。今回、「友だちを大切にすることはどんなことですか」という発問をすることで、行為のみを記入するのではなく、「思いやる心」「相手のことを考える心」などこれまでより内面をふりかえり多様な考えを表す児童が増えたことがわかる。また、学習した道徳的価値をこれからの自分の生活に生かしていこうという気持ちも書かれており道徳的価値の自覚が深まったことがわかる。したがって、書く活動を取り入れる

資料3 **道徳学習ノート**
3年2組 名前

★友だちをたいせつにするとはどういうことですか？

相手のことを考えてあげたりおまてたときはたすけたりすることでなかなかなれると思います。

★今日の学習で学んだことはどんなことですか？

友だちを、とてもたいせつにすることが、とてもたいせつなことです。
なにかあっても自分だけかえなくて、友だちやいろいろな人のことを考えてあげること。

① ほかのきもちになって考えることができましたか。	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
② 自分の思いや考えをつたえることができましたか。	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
③ 友だちの考えと自分の考えをくらべることができましたか。	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
④ 今までの自分をふり返ることができましたか。	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

ことは、自己の内面をじっくりと見つめ道徳的価値について考えを整理し心の奥にある気持ちを引き表すことができ、道徳的価値の自覚を深めるために有効な学習活動であるといえる。

研究成果と課題

1 成果

- (1) 友だちを思いやる心を育むために、内容項目の関連を図った道徳の時間を発展的、計画的に配列することで、友情・信頼の価値の自覚をより深めることができた。
- (2) 道徳の時間において資料分析と資料提示、話し合い、書く活動などの工夫をすることにより、児童が主体的に考え、自分自身をふり返り内面化することで友だちを思いやり、信頼し助け合おうとする心情を高めることができた。

2 課題

- (1) 内容項目の関連性を考慮した年間計画の作成を行う必要がある。
- (2) 後段における自己の振り返りをより充実させる工夫を深めていきたい。
- (3) 道徳教育充実のために他教科・領域との関連を図った学習活動の工夫を取り入れたい。

《主な参考文献》

『小学校学習指導要領解説 道徳編』	文部科学省	平成20年8月
『道徳的価値の自覚を深める発問の工夫』 廣瀬 久	明治図書	1999年
『多様な展開で子どもの考えを深める 小学校中学年の授業』 押谷 由夫・生越 詔二	明治図書	2002年
『よりよく生きる力を育てる道徳物資料集』 楠 茂宣	東洋出版社	2008年
『道徳教育』 9月号	明治図書	2008年
『さあ、道徳の授業をはじめよう』	長崎県教育センター	2004年
『道徳性をより高める単元的道徳学習』	毛内 嘉威 学事出版	2008年
『研究授業 小学校道徳 中学年』	永田 繁雄 明治図書	2004年
『小学校道徳 板書で見る全授業のすべて 中学年』	永田 繁雄 東洋出版社	2006年